

収蔵資料の利活用——資料にみる戦前神戸の風景

村上 しほり

1 収蔵資料の概要と利活用

1989（平成元）年に市制百周年を記念して開設された神戸市文書館は、『新修神戸市史』の編さん過程において、神戸市域に関する歴史的・文化的な価値のある文書や資料類を収集してきた。2026 年度に開館する神戸市歴史公文書館は、文書館資料を引き継ぐことに加えて、新たに保存期間を満了して移管される歴史公文書の保存・利活用を担う公文書館として、多様な収蔵資料を整理・公開する施設を目指している。

歴史公文書館は、資料の目録と画像等のデータをインターネット上で見ることが出来る収蔵資料管理システムを構築し、資料の登録・公開を進めていく。目録の編成は、表1の通りである。同システムは各資料区分の目録の検索機能に加えて、デジタルアーカイブとしての機能も有し、インターネットを通じて資料を検索したり、閲覧したりする利活用の展開が期待される。

文書館が収蔵する資料のなかでも、懐かしい神戸の風景をわかりやすく伝える写真や絵葉書等の資料については、今後より多くの方々に利用いただけるよう整理・デジタル化を進めている。本号では、収蔵資料を用いて、六甲山、生田神社・湊川神社、須磨、有馬、そして阪神大洪水について紹介する。その背景として、本稿においては、昭和初期神戸市の観光行政のもと発行された絵葉書資料を手がかりに、戦前神戸の名所・名勝の見方を整理してみよう。

表1 歴史公文書館の目録編成

資料種別	資料区分
公文書	1A 特定歴史公文書
	1B 震災関連文書
	1C 役場文書
写真等	2A 市政写真
	2B 寄贈写真
	2C アーカイブ写真館
	2D 絵葉書
	2E 映像・音声
刊行物	3A 図書
	3B 市政刊行物
	3C 地図
	3D 視聴覚資料
歴史資料	4A 市史編さん資料
	4B 古文書
	4C 戦災資料

2 資料にみる戦前神戸の名所・名勝

2-1 名所・名勝とは

戦前に発行された絵葉書や地図などの印刷物には「〇〇名所」「〇〇名勝」というタイトルが多く見られる。「名所」とは、すぐれた景色や史跡、特有の風物などで有名な場所を意味する。「名勝」とは、文化財保護法では、「庭園、橋梁、峡谷、海浜、山岳その他名勝地で我が国にとって芸術上又は観賞上価値の高いもの」のうち、重要なものとされている¹⁾。

「神戸名所」と「神戸名勝」を題した絵葉書は、同時期に複数のシリーズで発行されていた。これを見ると、1950（昭和25）年に文化財保護法が施行される以前は、「名所」と「名勝」を厳密に使い分けてはいなかったようである。

ここでは、神戸を代表する「名所」「名勝」とうたわれた風景を見てみよう。昭和初期に神戸市役所は「神戸名所」「神戸名勝」を広める複数の絵葉書を発行した。

2-2 昭和初期神戸の観光

1930年代は日本の観光行政にとって躍進の時代であった。1927（昭和2）年に経済調査会から「国際観光の振興」に関する答申が出され、1930（昭和5）年に鉄道省に設置された国際観光局によって、外国人観光客を誘致する観光宣伝が始まった²⁾。

神戸市役所では、1931（昭和6）年9月に秘書課の事務分掌に「観光施設に関する事項」を定め、1934（昭和9）年度に観光課を設置し、観光開発の取り組みを積極的に進めた。当館には、昭和時代初期に神戸市観光係や観光課が「神戸名勝」という表現で紹介した複数の絵葉書を所蔵している（表2）。

収集したり、寄贈を受けたりした資料のため、発行された枚数から欠けがあるかもしれない。一見したところ同じかと思われる絵葉書も、並べて見比べてみると時点が異なることや、取り上げられた対象が異なることがわかる。

ここでは特に、「神戸名勝絵葉書」というタイトルで神戸市役所が発行した、4つのシリーズ（No. 103、105、104、214）に着目する（表3）。

表2 当館所蔵の「神戸名所」「神戸名勝」絵葉書

種類	シリーズ No.
神戸名所	1[神戸名所 彩色]、3「最も新らしき神戸名所絵葉書」、36[神戸名所遊覧記念]楠正堂、60[神戸名所]（※1枚のみ）、155「神戸名所菊水楼」神戸菊水楼、168[神戸名所]、182[神戸名所]、185[神戸名所]
神戸名勝	18[舞子・神戸名勝]、103「神戸名勝絵葉書」神戸市観光課（=4、283）、104「神戸名勝絵葉書」神戸市役所観光係（=213 ※観光課発行）、105「神戸名勝絵葉書」神戸市観光課（=7）、135[神戸名勝]、176[神戸名勝]、184[神戸名勝]、213「神戸名勝絵葉書」神戸市観光課、214「神戸名勝絵葉書」神戸市役所観光係、216[神戸名勝]、249[神戸名勝]、278[神戸名勝]、308[神戸名勝]

表3 神戸市役所の発行した「神戸名勝絵葉書」にみる風景

シリーズ No.	103（4枚）	105（8枚）	104（6枚）	214（6枚）
種別	木版画	日本画	写真、解説付	写真、解説付
六甲山	○	○	○	○
布引の滝	○	○	○	○
須磨	○	○	○	○
市街地風景	○		○	○
湊川神社			○	○
摩耶山		○	○	
神戸港		○		○
その他		○○○		

4つのシリーズを見比べると、紹介された風景に相違点があることがわかる。すべてに共通するのは、六甲山、布引の瀧（雄瀧、雌瀧）、須磨の海浜や須磨浦公園である。このほか、神戸を代表する市街地だった元町通と湊川新開地、湊川神社、摩耶山、神戸港も見られた。105の日本画では、

このほかに再度山と鷹取山、鶴越が描かれている。

2-3 写真で紹介する「神戸名勝」

【資料情報】「神戸名勝絵葉書」神戸市役所観光係、1931～1934年、6枚（No.104）

【タイトル/104】六甲山、摩耶山、布引雄瀧、神戸市街、湊川神社、須磨の浦公園

【資料情報】「神戸名勝絵葉書」神戸市役所観光係、1931～1933年、6枚（No.214）

【タイトル/214】六甲山、布引雄瀧、神戸築港、湊川神社、湊川新開地、須磨海岸

104と214の表紙には「神戸名勝絵葉書 SOUVENIR OF KOBE -FAMOUS VIEW POST CARDS」と記され、さらに日英併記の解説が付されている。明らかに海外からの観光客の手に渡ることを意識したものと言える。

①発行時期の推定

発行者は「神戸市役所観光係」と記され、「秘書課観光係」が設置された1931（昭和6）年9月から観光課が成立する1934（昭和9）年の間に発行されたと推察される。214の絵葉書オモテに捺された記念印には「みなとの祭創始記念／8・11・7-8／神戸」と印字があることから、第1回みなとの祭りが開催された1933（昭和8）年11月に入手されたことがわかる。

2つの資料群に含まれる資料タイトルは、きわめて似ている。しかし、同じ対象を取り上げてもアングルの異なる写真を使用していること、214の写真がそれぞれに調色したプリントであることなどから、104、214の順に発行されたものではないかと思われる。



②写真と解説から読む神戸の風景

No.104の「六甲山」はスキー場の風景である。1910年代（明治末期）に外国人により山上でのスキーが始められ、大正末期には、六甲スキー倶楽部、神戸スキー倶楽部が結成された。当時はめずらしいレクリエーションだったのであろう。解説には、交通手段でもあるロープウェイとケーブルカーや、山上のキャンプ、スキー、スケートの理想郷、関西屈指のゴルフ場という魅力あふれるレクリエーションが紹介された。

「摩耶山」には摩耶山天上寺と、その眼下に神戸の市街地と築港風景がみとめられる。解説には「ケーブルカーによって容易に登り得られる眺望開豁」と記された。

「布引瀧」では雄瀧が写され、「雄瀧は二十丈、雌瀧は五丈」と、瀧の大きさが紹介された。日本



では明治時代の尺貫法で 1 尺=10/33m (=約 0.303030m) と定義された。また、1 丈=10 尺=約 3.03m のため、20 丈は 60.6m にあたる。また、No.104 では木々に垣間見える雄滝の美しさを見せていたが、No.214 では木々を避けたフレームからはっきりと雄瀧を見せるアングルが採られ、並べてみるとその印象はまるで異なる。

「神戸市街」は諏訪山から、手前に相樂園と諏訪山小学校、兵庫県庁と県公館、そして旧居留地や埠頭までの「海港神戸の中心地帯」を眼下に一望している。

2-4 日本画で描く「神戸名勝」

【資料情報】「神戸名勝絵葉書」神戸市観光課、1934～1936 年、8 枚 (No.105)

【タイトル】六甲山、布引雌瀧、須磨之浦公園、摩耶山、神戸港、再度山、鷹取山、鶴越

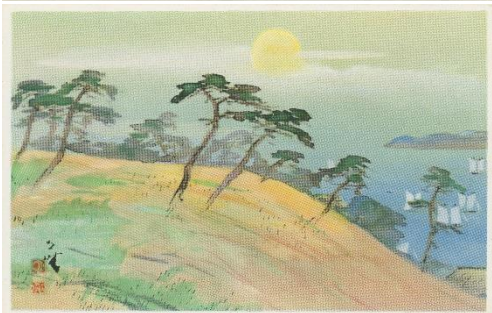
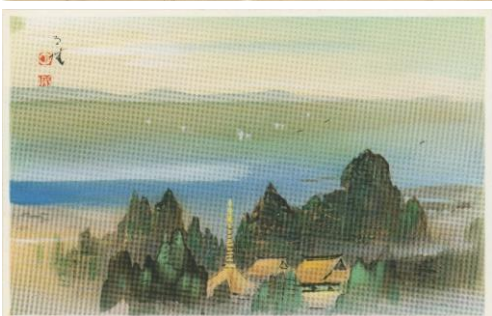
No.105 は、8 枚のうち「神戸港」を除く 7 枚が自然風景を描いている。日本画であることから昔ながらの風光明媚な風景や史跡を取り上げたのだろうか。一方で、絵葉書のタイトルには英語のタイトルも付記されており、海外からの観光客を意識して発行されたことも見てとれる。

①神戸に向けるまなざし

これらの絵葉書は 4 人の日本画家によって 2 枚ずつ描かれている。ここでは 2 人を紹介する。

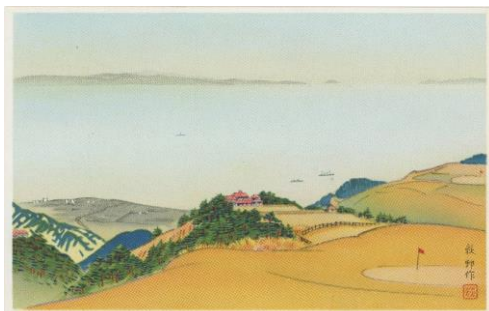
絵葉書の袋と「摩耶山」「須磨之浦公園」は、兵庫県日本画壇の中心人物として後進の指導にあたった森月城（もり・げつじょう、1888～1961 年）の作である。兵庫県加東郡社町（加東市）に生まれ、京都で竹内栖鳳に師事し、1914（大正 3）年に京都から須磨に移り住んで神戸絵画協会、神戸美術家協会の結成に参加した。亡くなられる直前の 1961 年には、「須磨の浦」と題して『月刊 神戸っ子』で次のように語っていた。

汐見台から見下すと海を一望できて夕暮れどきに、幾十そうもの帆船がちらばって見えて、須磨の浦の



素晴らしい風情に魅せられたものだ。とくに、須磨で一番いいのは月のある風景だと思う。「月と言えば、須磨」とあい言葉のようにいはれているが、私も須磨の浦の月に日本一と折紙をつけていい。³⁾

「六甲山」と「神戸港」は当時、京都市立絵画専門学校（現京都市立芸術大学）の助教授だった宇田萩邨（うだ・てきそん、1896～1980年）の作である。神戸にゆかりが深いわけではないが、著名な四条派の近代日本画家であった。六甲山にはゴルフ場と、1929（昭和4）年に宝塚ホテルの分館として開業した六甲山ホテルが描かれたのだろうか。また、神戸港には、1911（明治44）年に東洋汽船から大阪商船に売却されて神戸－基隆間の台湾航路や大連航路に就航した「あめりか丸」が中心に描かれている。



②袋の表紙と山麓電飾

袋の表紙には、錨山と市章山の黄色に輝く電飾と、緑の山々が描かれている。表紙に捺された記念印には「布引観光記念／神戸市観光課／11.8.4」と印字があり、1936（昭和11）年に入手されたことがわかる。

神戸市のランドマークである錨山と市章山は、本市にとって歴史的に重要な行事とともに成立した。錨山の由来は1903（明治36）年に明治天皇行幸の観艦式を記念して、小学生が錨型に並んで日の丸を振り、天皇を迎えたことにある⁴⁾。さらに、1907（明治40）年に神戸港の築港起工式記念を機に、「錨」と同年に生まれたばかりの「市章」のかたちに松が植栽された。1933（昭和8）年には第1回みなとの祭りを記念して仮設の電飾が施され、1967（昭和42）年の神戸港開港100周年をきっかけにして、夜間の電飾を恒常化した。

また、1989（平成元）年に市制100周年を記念して開催されたフェスピック神戸大会を機に堂徳山にも点灯をはじめた。「KOBE」「北前船（正面）」「北前船（側面）」の表示が変わる電飾もいまやお馴染みで、これらの山麓電飾は神戸のシンボルとなっている。

2-4 川西英『神戸百景』で彩る「神戸名勝」

【資料情報】「神戸名勝絵葉書」神戸市観光課、昭和初期、4枚（No.103）

【タイトル】背山眺望、布引ノ瀧、須磨海水浴、元町通

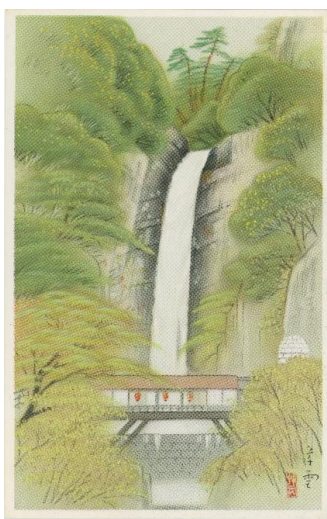
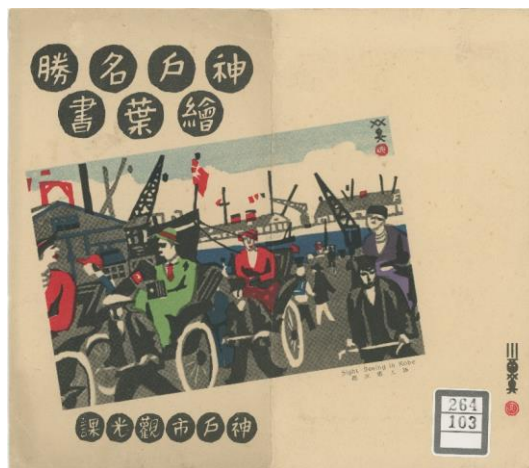
No.103は、川西英（かわにし・ひで、1894～1965年）が1933（昭和8）～1936（昭和11）年に制作した版画『神戸百景』の作品から選ばれた4枚である。

袋には1935（昭和10）年7月に制作された作品「観光団上陸（Sight-Seeing in Kobe）」が刷られ、神戸港から人力車に乗って市街地へ向かう洋装の男女が見られる。

「布引ノ瀧（布引雌瀧）」は布引雌瀧を観瀑橋越しに眺める風景と見られる。No.105の「布引雌瀧」でもほぼ同じ画角で描かれており、まさに、神戸を代表する「描きたい名勝」

だったと言えよう。その一方で、写真の絵葉書では雄瀧、絵画の絵葉書では観瀑橋越しの雌瀧と、対象が異なったことにも何か意味があるのかもしれない。

また、川西英の作品制作の時期からは、「背山眺望」は1935年1月、「布引ノ瀧」は1936（昭和11）年8月、「須磨海水浴」は1936年9月、「元町通（元町夜雨）」は1936年8月。ここから、絵葉書の発行時点は1936年9月以降であることがわかる。



注

- 1) 文化庁 HP <https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/meishou/>
- 2) 村上 しほり『神戸 闇市からの復興—占領下にせめぎあう都市空間』慶應義塾大学出版会、2018年
- 3) 森月城「須磨の浦」『月刊 神戸っ子』1961年7月号
- 4) 神戸市 HP <https://www.city.kobe.lg.jp/a17526/kanko/leisure/landmark/denshoku/shisyo.html>